

獨唱・合唱
西歐名曲
第三卷

シ ル ヘル 氏 作 曲

つはもの

近藤逸五郎 作歌

發刊の辭

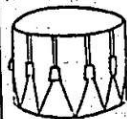
四歐樂壇に於て不朽の名曲といはるゝものゝうち、容易にして何びとにも唱ひ得べきを選び、これに原歌の意をかりて國語の歌詞をつけ、其の解説をも添へ、獨唱西歐名曲と題して發刊することゝなせり、これ四歐音樂の隆盛につれ、漸く音樂的價值なき淺趣味極まる四歐風歌曲の流行する音樂界に、かの國の健全なる作品を紹介して、國民の音樂趣味を高ふせんとの趣旨にほかならざるなり。

語脈の異なる歐語をば綴音を合せ韻をふみつゝ國語に移植すること既に至難の業なり、然るに樂譜に配するに當りては更に旋律、拍子、強音及び停音の制限あり、伴奏との關係あり、聲の高低に従ひ唱ひ易き字音を選ぶべきはもとよりのこと、なる可く深き印象を聽衆に與へんがため、短くして而も力ある語句を選用せざる可らず、されば原歌の意を餘さずして新しき歌詞を配するはなし得べきことに非ず、原歌のめてたきに比して譯歌のあはれなるはこれがためなり、さはいへど音樂の表現は靡ろげなるが故に、全く樂匠の感得を無視するはいはれなきことなれど、必しも嚴格なる譯歌を配さざるも可ならん、たゞなるべく原歌の意を汲み樂曲の表現を考へて詞句を選び、作曲者の意に違はぬ様にすればよろしかるべし。吾等か新しき歌詞を添ふるに當り、常にこの覺悟を以てして、れば詞音と音符との適合に關しては音樂上効果を損せざる範圍に於て、比較上自由なる方法を探りたれど、技巧のために樂譜を犧牲にするが如きはなるべく避けたり。然ればたとへ歌詞は拙くとも稍々原曲のおもかげをうかゞひ得られんか。

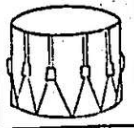
尙卷を重ねるに従ひ趣味ふかき歌曲を選びて、これが譯歌をわが先賢に乞ひ、そを掲載して四歐歌曲の妙趣を紹介し、併せてその術語などには注釋を加へ、また時に獨唱曲にはそを二部、三部あるは四部合唱に整曲したるをあげて掲げて、唱歌研究の一助たらしめんとす

明治四十年七月

編者 巖



如 山 堂 出 版



つはもの

あはれ侘し喇叭の音、

あはれ傷まし友。

死期の歩調力なく、

淋しき野路ひかれゆく。

あゝ、わが胸さくるよ。

きわが友、

撃てよこは恨めしや。

音楽を合圖に兵士、

銃をこりてぞ居並びぬ。

指揮待つ間につれなさ。

近藤逸五郎

嬉しげの朝日かけ、

臨終にたゞ瞥見。

あゝ無常やわが友、

いまは眼も塞がれぬ。

あゝ、ゆけや天國へ。

四

ならぶ兵士九にん、

はやも飛ぶ弾丸八發。

悲嘆に撃つ手ひるみて、

たゞわが弾丸あたりぬ。

あゝ、胸のたゞなか。

つばもの

(獨唱)

FRIEDRICH SILCHER.

Langsam.

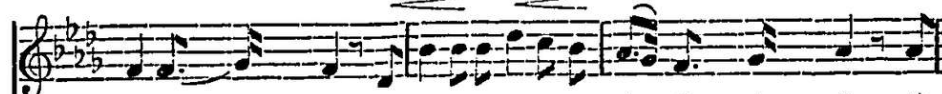
p



1.	ア	ハ	レ	ヲ	シ	ラ	バ	ノ	子	ア	ハ	レ	イ	タ	マ
2.	フ	タ	リ	ナ	ヲ	ガ	ト	一	モ	ウ	テ	ロ	ト	ハ	ウ
3.	ワ	レ	シ	ゲ	ア	サ	ヒ	カ	ゲ	イ	マ	ハ	ニ	タ	ダ
4.	ナ	ラ	ア	ツ	モ	ノ	ク	ニ	ン	ハ	ヤ	モ	ト	ア	ダ



pp



シ	ト	一	モ	シ	ゴ	ノ	ユ	ミ	チ	カ	ラ	ナ	ク	サ
ラ	メ	シ	ヤ	ガ	ク	ア	ヒ	ツ	ニ	ツ	ハ	モ	ノ	ツ
ビ	ト	一	メ	ア	ア	ツ	レ	ナ	シ	ア	ガ	ト	モ	イ
マ	ヤ	ハ	ツ	ナ	ゲ	キ	ニ	ウ	テ	ル	ミ	テ	テ	タ



pp



ビ	シ	キ	ノ	ミ	チ	ヒ	カ	レ	ユ	ク	ア	ア	ソ	ガ	△	子	サ	クル	一	ヨ	
ツ	チ	ト	リ	テ	ソ	キ	ナ	ラ	ビ	ヌ	シ	キ	マ	ツ	マ	ノ	ツ	レ	ナ	一	サ
マ	ハ	マ	ナ	コ	モ	フ	サ	ガ	レ	ヌ	ア	ア	ユ	ケ	ヨ	ヤ	ミ	ソ	ラ	一	ヘ
ダ	ワ	ガ	タ	マ	ア	ネ	リ	一	ヌ	ア	ア	ム	子	ノ	タ	一	ダ	ナ	一	カ	



f

解 説

この歌曲は題して *Der Soldat* といふ。原歌は有名なる獨逸の詩人シャミッソ (*Adelbert von Chamisso* 1781—1838) が一八三三年にもしたる歌謠にして、ある兵士が最も愛したる友の軍法にふれて死刑に處せらるゝに當り、そを銃殺せよと指揮官より命せられたる慘話をうたひたるものなり。歌詞は四段よりなる、まづはじめに刑場へ行くしめやかなる歩調をうつし、つぎに最も愛せる友を殺さんとして哀れなる音樂の響につれて兵士は銃をとりて列をなせり、われもその指揮を受くるの身なりと胸裡のかぎりなき苦痛を訴へ、つぎに終焉の刻はきたりぬ、わが友は蒼空を仰ぎて神の朝日のうれしき光をひと目みたり、かくてその眼は掩はれぬ、あゝ神よ、願くば永劫の平和を興へ給へとの祈禱をさぐ。最後は九人の兵士すでに並びたち八個の彈丸はすでに飛びたり、されどその手は悲嘆と苦痛とにふるへけむ皆あだとなりぬ、たゞ最終にはなちしわが彈丸のみわが最も愛せし友の胸のたゞなかに當れりといふ慘憺たる情景を描きたり。わが譯歌も殆どその意味と感情とをうつしあれば唱歌者はこれが歌詞のしめすがまゝに表情を施せば可なり。樂曲は愛らしき歌謠の作曲家として有名なるトウィペンゲン大學の音樂部長たりし博士シムルン (*Friedrich Silcher*, Dr. phil. hon. C.; 1789—1860) が一八三七年につくりしものにて靜なる進行曲の拍子 (*Langsamer Marschakt*) を以て唱ふべきものなり、左手の伴奏にあはるゝ參拾貳分音符の連続は太鼓の響にしてはじめの二回は最も弱く (*Pianissimo*) 演奏するを要す。

西歐樂匠十二大家作曲 和田英作君 和 田三造君 畫

文學士 上田 敏君 石倉小三郎君 乙骨三郎君 近藤逸五郎君 編

獨唱名曲集

大形全一冊 正價金八拾錢 郵税八錢

本書の特長を略記すれば

- (1) 従来の唱歌集は原歌の意を傳へたるもの殆ど皆無なるに反し、本書は各作曲家が非常なる苦心を以て、悉く原曲の樂音に合せ原歌の意を採て作歌せられたるが故に、唱歌者は原語を以て唱ふと同様の感ある事
- (2) 本書には悉く伴奏を附したるを以て、演奏會に、家庭に、必適する事
- (3) 第一層の趣味を加へんか爲め、最も詳密なる樂曲解説を附したるが故
- (4) 樂室に隣附たる光彩を放たしめんが爲め、歌曲全部を二遍刷となし發行亦潤煙を種めたり此點に於ても亦在來の唱歌集に見るべからざる事

以上熟れの點より見るも、音樂界空前の快舉を遂げたるもの也、今や斯技益旺んにして、然も音樂書の陳套なる事依然たる時に際し、斯の如き理想的唱歌集の出でたるは蓋し時代の要求に副へるものなり、乞ふ學校に、家庭に、續々採用あらん事を。

編氏藤近

唱歌科の新教材發行

獨唱 西歐名曲

每卷凡十錢 以内の限定

- (獨唱・三部合唱) 子もり歌 シュベルト作曲 以下
- (獨唱) さらば シュベルト作曲 諸
- (四部合唱) 流浪の民 シユウマン作曲 大
- (獨唱) 少女の願 シヨマン作曲 家々
- (獨唱・三部合唱) 野薔薇の花 シュベルト作曲 作
- (獨唱・三部合唱) つはもの シルヘル作曲 行
- (獨唱・三部合唱) わかれ メンアルソオン作曲

明治四十年八月九日印刷
明治四十年八月十二日發行

著者權所有

編者 近藤 逸五郎
發行兼印刷者 今津 隆治
印刷所 (外裝) 株式會社秀英舎
(內容) 數文館印刷所

發行所

東京市日本橋區上橋町
如山堂書店
振替貯金口座六四三五番